

## 大槻國彦の“出会いと献身のドラマ” 1953

### はじめに

人生とは不思議なものです。良くできたドラマのように意外な筋書きが展開したり、小さな出会いやちょっとした勘違いによって、その後の人生行路が見事に変わられてしまうということも起こりえます。そんな人生を誰もがみんな背負っています。単なる偶然の積み重ねに過ぎないと割り切る生き方にせよ、聖なるお方の「ご計画」がそこにあると信じる生き方にせよ、どちらにしても証拠をもって証明することではありませんので厄介です。ただ、焦る必要はないのでしょうか。いずれ迎ってきた我が人生の道程を振り返る時に、本人だけにははっきりとどちらが正解だったのかは示されるのでしょうか。その時が来るまでは、想定外のことが色々起こる人生をあまり悲観視することなく、多少楽観的に構えてそれぞれの人生を受け止めていければとは思いますが・・・。

### 1. 大槻國彦青年とグラント宣教師の出会い

さて、大槻國彦さんは仙台教会が生み出した最初の献身者です。高校を出てすぐに神学校に進学し、神学校卒業後、福岡県の粕屋伝道所の専任牧師<sup>1</sup>として招聘され、2年間の牧会経験を積んだ後に按手を受けることとなります。その按手礼拝の説教の中で、彼はご自分とキリスト教との出会いについて述べていますが<sup>2</sup>、その内容を要約すると以下の通りです。

大槻國彦さんは1936年（昭和11）に仙台市に生まれました。戦時中、父親と兄は民間兵として満州に渡っており、仙台の自宅で彼と母親の二人暮らしをしていました。ところがその母親は、1945年（昭和20）7月10日の仙台空襲で亡くなってしまい、当時9才の國彦少年は、父の郷里に住む祖父や叔父・叔母のお世話になることとなります。その田舎にも爆撃機が飛んできて空襲を受けたそうです。家の近くに陸軍の練兵所があったからです。説教の中では父の郷里がどこなのか具体的には語られていませんが、その練兵所というのは県中央部に現在もある王城寺原演習場<sup>3</sup>のことでしょう。ということは色麻町、大和町、大衡村あたりが、父親の郷里の候補地ということになります。更にグラント師の思い出を綴った大槻師の他の文章を

読み合わせると、父の郷里は鶴巢村であったことが分かります<sup>4</sup>。

戦後の混乱の中、心は不安や孤独感に溢れ、自分自身の存在意味を自問しても、空しさだけが山彦のように返ってくるような日々を送っていた國彦です。

ある日、彼は北仙台の大きな教会の頑丈な鉄の門の前に立っていました<sup>5</sup>。門の内側の空間には、自分が生きている世界とは全く違う世界が広がっているかのようでした。その教会の隣に外国人の家らしい建物がありましたが、当然大きな教会と繋がりのある家なのだろうと國彦は思いました。その洋風の建物の小さな門の近くに掲示板があり、十字架に掛けられたキリストの絵が飾られ、開かれた聖書も置いてありました。そして小さな看板には、「キリスト教について知りたい場合はどうぞ遠慮なくお入りください」と書かれていました。その言葉に誘われるように、10代も後半になった國彦青年は小さな建物の扉を叩いていました。それがグラント師との出会いであり、キリスト教との出会いとなります。1953年（昭和28）7月のことでした<sup>6</sup>。後になって、大きな教会はカトリック教会<sup>7</sup>、隣の小さな建物はその教会とは関係のない、バプテストの宣教師館だったことを彼は知るのでした。

## 2. 宣教師館の屋根裏部屋に居候

國彦青年はグラント師からもらった福音書の分冊とパンフレットを読む中で、次第にキリスト教に興味を持つようになります。祖父の家では、夕食後のいり端での団欒の時にも、聖書やキリスト教に関する本ばかり読んでいもので徐々に家族から煙たがられ、皮肉を言われるようになります。叔父からは、「宣教師の神を信じたいなら、宣教師に飯を食わせてもらえ」とまで言われる始末です。そこで1954年（昭和29）の旧正月の頃に、17才の國彦青年は仙台に引っ越すことを決意します。しかし、住む場所や仕事の当てがあったわけではありません。相談を受けたグラント師は、夫妻の日本語学習を助ける「仕事」を彼にしてもらう代わりに、宣教師館の小さな屋根裏部屋と食事を提供したのでした<sup>8</sup>。

そしてその間、礼拝や普段の生活においてグラント師から熱心な指導を受け、やがて信仰の決心に導かれ、同年4月18日に広瀬川でバプテスマを受けることとなります。その時彼は、これが自分の新しい人生の本当の始まりなのだ、と強く感じたのでした。自分自身の無知・無力を自覚していましたので、牧師になろうなどとは考えもしませんでした。やがて宣教のために自らの人生を捧げたい、との決意へ

と導かれることとなります。

### 3. 神学校を目指した 20 才の高校生

その決意をかなえるため彼は神学校を目指すこととなりますが、そのためには高校を出ていなければなりません。そこで一浪して 1956 年（昭和 31）に仙台高校に入学します。貧しかったため学生帽もキャンバスシューズも準備できず、また既に 20 才であり年齢的に目立った存在でしたので、入学して直ぐに教頭に呼び出され、飲酒・喫煙・服装・生活態度等について指導を受けました。その時彼は、自分は何としても神学校に入りたいこと、そのために高校に入学したことを告白します。「神学校に入学するつもり 크리스チャン」というレッテルを貼られての 3 年間の高校生活を終え、やがて 1959 年（昭和 34 年）4 月に「バプテスト神学校」<sup>9</sup>に入学し、献身者としての歩みが具体的にスタートするのです。

大槻師の「キリスト教との出会いと献身の物語」は、何かドラマのようです。神の不思議な御手の業をそこに見る思いがします。しかし、これは稀有なケースなのだと思ってしまうのはいけないのでしょうか。なぜなら、信仰に導かれた私たち自身も、神のドラマの中でそれぞれ主人公に抜擢され、何回もダメ出しの指導を受けながら成長させていただき、自分に与えられた台本の解釈に悩みながらも、結局は聖なる演出家を信頼し、良い舞台を作ろうと日々励んでいるようなものなのですから。（文責：小林孝男）



カトリック北仙台教会、1951 年（昭和 26）完成。この荘厳な建造物に目と心を奪われたことがきっかけで、大槻青年の人生は新たな方向に展開した。

---

<sup>1</sup> <https://www.bapu-kyoukai.com/sub3.html>(2024年9月14日閲覧)、粕屋バプテスト教会の伝道所時代から専任牧師として38年間、伝道・牧会に励む(1964/04~2002/03)

<sup>2</sup> 『ワース・C・グラント師の日本観』167~178頁。按手礼拝は1966年(昭和41)頃

<sup>3</sup> 王城寺原演習場は黒川郡大和町、大衡村、加美郡色麻町にまたがり、その面積は4,651.4ha。演習場は明治14年から旧陸軍が使用し、昭和20年駐留米軍に接収され、昭和33年に返還され、その後は自衛隊が使用し、現在に至っている(宮城県公式ウェブサイト参照)

<sup>4</sup> 資料(2011/05/01\_記念誌・ねむの木に寄せて\_抜粋) 32~33頁

<sup>5</sup> 同上 32頁、その日國彦が北仙台にいた事情が書かれている。

<sup>6</sup> 同上 32頁、相馬の野馬追は7月に開催される。

<sup>7</sup> カトリック北仙台教会。カナダ管区聖ドミニコ男子修道会付の教会である。ドミニコ会士故ピエール・ビソネット神父の尽力により1951年8月に献堂された。

<sup>8</sup> グラント師の著書の合本版巻末の付録、298頁。そこには2003年7月6日に師が仙台教会で行った説教の原稿が収録されており、その中にこの逸話が紹介されている。

<sup>9</sup> 西南学院大学文学部神学科(当時)